

第一問 次の文章は島田潤一郎^{しまだじゅんいちろう}の「大学の教室で」という文章の一節である。筆者は大学一年生の時に受講した「日本文学を考える」

という授業が面白かったので、翌年同じ先生による「文章表現」という授業に出席するようになった。受講生一〇人に満たないその授業で、筆者はその先生の指導を受けたり、同級生Hの書く小説や彼の勧める小説にも影響を受けたりして、小説を書くようになる。以下はそれに続くこの文章の後半部分である。これを読んで、後の問いに答えよ。

先生は、小説をとおして考えなさい、といった。

ぼくはその言葉の真意が何度聞いてもよくわからなかったが、とにかくHや作家たちの文章を真似^{まね}して、毎日ワープロに向かって小説を書いた。あるときはHのスタイルそのままに、母の生まれ故郷である高知を舞台に短篇を書き、あるときは海外文学の真似事をして、パリの郊外を舞台に小説を書いた。またあるときは暴力を正面から描いた長篇を書き、あるときは「義眼」をモチーフにさらに長い小説を書いた。

幸運なことに、ぼくは大学四年生のときに、その「義眼」をモチーフにした小説で大学から賞をもらった。それは「日大文芸賞」という、日本大学全学部の学生を対象にした小説コンクールだった。選考委員の黒井千次^{くろいせんじ}さんが寸評で「ここに小説がある」と評してくれたことがぼくに自信を与え、結局、大学を卒業してさらに五年間、定職にも就かず、小説を書き続ける日々を送ることになった。

「とにかく、書き始めること。そして一度書き始めたなら、最後の一字までなんとしても書き切ること」

佐藤先生は口をスツ^aぱくして、ぼくたちにそう伝えた。

それが「小説をとおして考えなさい」という教えとほとんど同じ意味であるということに、ぼくは二〇代の半ばになってようやく気づいた。

最初は自分でもなにを書きたいのか、よくわからないのである。ただ、書きたいシーンや、セリフのようなものがなんとなく

あつて、そこへなんとか辿り着こうと四苦八苦して文章をひねり出す。

ひとつの文章を綴れば、その文章が次の文章を導き、その文章がさらにその次の文章を育む。その繰り返しで、数万字の小説を綴る。費やす時間は、ひとつの作品にたいしてだいたい半年から一年ぐらいだ。

ミステリーなどのエンターテインメント小説であれば、物語にははつきりとした結末が用意されていて、作家はそこに向かつて、チミツに文章を構築していくのだと思う。

けれど、ぼくが先生から教わった小説は、^①そういうものではなかった。

「作家ですら、なにを書こうとしているのかはわかっていないのだ」というのが先生の考え方で、だからこそ、小説はおもしろいし、スリリングなのだ、と先生はぼくたちに伝えた。

それはいまにして思えば、先生の、人生にたいする態度のようなものであつた。

そのころ、ぼくが夢中になつて読んだ小説に、ミラン・クンデラの『存在の耐えられない軽さ』があり、その長篇の冒頭には次のような一節がある。

「人間というものはあらゆることをいきなり、しかも準備なしに生きるのである。それはまるで俳優がなんらの稽古なしに出演するようなものである。しかし、もし人生への最初の稽古がすでに人生そのものであるなら、人生は何の価値があるのであろうか? (略)

アインマル イスト カインマル
Einmal ist keimmal (一度は数のうちに入らない)と、トマーシュはドイツの諺をつぶやく。一度だけおこることは、一度もおこらなかつたようなものだ。人がただ一つの人生を生きうるとすれば、それはまったく生きなかつたようなものなのである」

ここに書いてあることはつまり、自分の人生というものはそれがたった一度である限り、練習することも、理解することもか

なわなないということだ。ひよっとしたら、臨終の際^{きわ}になってようやく、「わたしの人生はこうだった」と認識し、理解できるものなのかもしれないが、そのときにはだれかに伝える術がない。

② 若いぼくは、クンデラのその指摘に驚き、そして不思議なくらいに胸を打たれた。

というのも、それまでのぼくは人生になにかしらの意義があり、目的があつて、その目的に殉じるようにして生きなければならぬのだと思つていたからだ。

それは裏返してみれば、自分の人生には揺るぎのない価値があるということであり、ぼくが欲していたのは、その「揺るぎのない価値」にふさわしい言葉を与えるということであつた。

もちろん、作家は小説を通して「人生に価値などない」といつてゐるわけではなかつた。事實はたぶんその逆で、作家たちはみな、小説という器をつかつて、人生の価値をあらゆる角度から計測しようとしていた。

ある小説は主人公の父母が偶然出会うところからはじまつた。ふたりは結婚し、数年後に物語の主人公が生まれる。彼は学校でさまざまな友人たちに出会い、社会に出て妻に出会い、子育てを経験し、自分の人生とはなんであるかを考え、しばし歩みを止める。

またある小説はだれもが知る歴史上の人物に、日々のディテールを与え、その偉大とされる人物がぼくたちとまったく同じように些細^{ささい}なことで喜び、悲しむ人間であることを物語つた。

またある小説はたくさんの登場人物を巧みに書きわけることで、たったひとつの事実が見る人によつていかに異なるかを描き、とどのつまり、社会とはどういうものであるかを意欲的に解き明かそうとした。

読む小説のすべてが手本だつた。最初から最後までカンペキだと思わされる小説もあれば、最後の数ページでそれまでの単調な印象をすべて吹き飛ばすような快作もあつた。

ぼくは小説を書く技術を学ぶためというよりも、どのようにしてこの物語は終わるのか、そればかりを気にしながらページを

繰った。

ありきたりの結末にたどり着けばがっかりしたし、どんでん返しのような終わり方にも興醒めをした。ここに書いてあることは本当のことではない、と思った。

大学を卒業してしまうと、小説のことをだれかと話すという機会はめっきり減ってしまった。Hは英語を勉強するといってアメリカに留学し、文芸研究会の先輩たちも、社会に出ると、小説の話よりも仕事の話のほうを重んずるようになった。

卒業した翌年、アルバイト先のコンビニエンスストアで偶然、ぼくが毎月愛読している雑誌のライターと知り合うということがある、その人とはたまに本や音楽の話をしたが、ぼくがある日小説を書いていると打ち明けると、その人は急にこそよしくなってしまった。

アルバイトは夜の一〇時にはじまって、翌日の午前八時に終わった。朝の冷たい空気のなか、会社に通勤する人たちとは反対の方向に自転車をかこぎ、家賃一万八〇〇〇円の木造アパートで賞味期限切れの弁当を食べながら、アルバイトに行く直前まで書いていた小説を読み返した。

よく書けている、と思うことはめったになく、たいてい眠くなる直前まで小説を書き直した。

けれど、夕方に目を覚ますと、朝方にぼくが手を入れた小説はさらにひどくなっていると気づくことのほうが多かった。

この小説がよいものか、悪いものなのか皆目わからず、感熱紙に打ち出して、いろんな場所で読んだ。

駅前のファストフード店。公園。図書館。小田急線。京王線。山手線。

けれど、結果はいつも同じで、ぼくの小説はせいぜい「ところどころ、いいところがある」ぐらいのレベルなのだった。

「なにかが終わったと感じたときに物語が立ち上がるのです」

教室のなかで、先生はそうもいつていた。

たとえば、だれか身近な人が亡くなったとき、ぼくたちはその人についてなにかを語りはじめたくなる。ひとつの人生の幕が降り、残された者の前にはその人を語るための材料がすべて出揃ったからだ。

パートナーと別れたときも、その構図はそんなに変わらないだろう。喫茶店で、酒の席で、または終わらない長電話で、語り手はどのようにしてその恋人と別れたのかを聞き手に向かって訥々と打ち明ける。

話すことによつて初めて、たしかめられる何かがある。あるいは、発見できる何かがある。

語り手は相手のところのいちばん奥にまで届くように、さまざまな工夫をこらして恋の顛末を語る。物語に強弱をつけ、うろ覚えであるはずの恋人の台詞を再現し、重要なシーンでは、それがいつ、どこで起こったことだったかはもちろん、相手の服装や、本筋とは一見関係のない会社の人間関係などについても言及をする。

相手が「うん、うん、そのとおりだ」といつてくれれば、気持ちもおさまる。けれど、「きみはほんとうにそれでいいのか？」とか、「きみはまだ相手のことを変わらずに好きなのでないか？」などといわれようものなら、^③終わるはずの物語は終わらなくなる。

店を出て（あるいは電話を切り）、語り手はもう一度、恋人とのことを思い出す。

こころのなかには、今もなお生々しく記憶に残り、うまく消化できないなにかがある。

ほんとうはその「なにか」をうまく言語化し、だれかにきちんと伝えてみたい。

けれど、そのことを話す回路のようなものをどうしても見つけることができない。

おそらく、このようなことと、ワープロに向かって小説を書くということはとても似ているのだ。

小説家を目指していたころのぼくのこころのなかにもまた、言語化し、物語化して、読み手のところのいちばん奥深いところに届けたいなにかがあった。

それはたとえば、ぼくひとりだけが見た、なんてこともない光景であったり、忘れられない家族の仕草だったり、友人たちとの間で流れていた他愛もない空気だったりした。

——なぜか忘れられないんだ——

ただそういつて、その光景をそれとなく誰かに話せばよかったのかもしれない。

あるいはいまだったら、それを丁寧な文章に起こし、またはスマートフォンのカメラにおさめて、SNSに投稿すればいいのかもしれない。

けれど、^④ ぼくはただ伝えただけではなかった。

ぼくは、ぼくが感じたとおりに、相手にもその一瞬の光景に感じ入ってもらい、そして出来れば、それを永遠に忘れないでいてほしかったのだ。

締め切り日の夜の一時を過ぎたところに、急いで小説を打ち出して、夜間窓口のある郵便局へ自転車を飛ばす。ぼくは局員に「速達でお願いします」と告げて、文学賞の応募先に原稿を送る。

いちばん達成感があるのはこのときで、自分へのご褒美とばかりに自動販売機であたかい缶コーヒーを買う。

最初のうちは、その小説がどこかの新人賞に選ばれ、先生に「ついにやりました！」と電話で報告する未来を頭のなかで思い描いている。

けれど、一次選考にも通過しないという現実が何回も続くと、先生のこととも思い出さなくなり、小説家という未来のこともまったく考えなくなった。

——ぼくは青春を棒に振ったのだろうか？——

何度か、そんなことを思った。

同級生たちのほとんどは大学を卒業すると同時に会社に入り、それぞれの場所でキャリアを積み重ねていた。

小売店に勤務する者は地方に転勤をして、現場で管理職を務め、教員を目指して採用試験の勉強に励んでいた者は、試験に合格し、すでに教壇に立っていた。平成の金融危機によって会社が倒産し、やむなく転職をした同級生もいたし、必要なのは資格

だといって、早々と会社を辞めて専門学校に入り直した同級生もいた。

ぼくだけがいまだに大学時代のことをずっと思い出し、考えていた。

その四年のあいだになにか特別なことがあったわけではなかったし、ぼくには恋人もいなかったし、告白も、落第も、病気もなかった。

でも、その平坦な四年間のことを反芻^{はんすう}して、それを言葉にし、物語にしようとずっともがいていた。

⑤ 人は物語をとおして、さまざまなことを理解しようとする。

ぼくが小説を書くという経験をとおして学んだのは、一言でいえば、多分そういうことだ。

だれかはだれかのことを好きで、だれかはだれかのことをネタましく思っていて、だれかはとにかく、みんなよりも偉く、立派になりたいと願っている。

もちろん、それらは日々揺れ動く人間の気持ちのひとつの側面でしかないが、その側面を重ね合わせたり、離したり、いがみ合わせたりして、人は自分の身に起こっていることや、過去のさまざまな出来事を真剣に理解しようとしている。

喜劇や、悲劇や、勧善懲悪や、快復や、自己実現の物語。大げさにいえば、歴史だって、民族という概念だって、そのような単純化した物語以外ではないはずだ。

一〇〇年前の、一〇〇〇年前の人々の気持ちや行動を想像し、理解するベースは自分の気持ちであり、経験であるが、かつて親に読んでもらったり、自分の力で読み進めたりしたたくさんさんの絵本や、マンガや、小説や、スクリーンで見えてきた数々の映画もまた、遠くの人たちのことを考え、想像することのベースになっている。

大好きな恋人がいなくても、長年抱いていた夢が叶^{かな}わなくても、親しい人が病とたたかっていたいなくても、人生は続くし、毎日
は続く。

仕事をし、食事をし、電話で親と話し、テレビで好きな芸能人を見て、なんとなくどこかへ行きたくなって、最寄りのコンビニへ足を運ぶ。

こうした日々の行為は、当人だけが知り、記憶していることで、その当人がいなくなってしまうえば、だれもがそれを知る機会を失うだろう。

そうした毎日のなんでもないことこそがかけがえないのだ、といたいわけではない。

けれど、たとえば、ひとりで夜道を歩いていて、突然むかしの友だちを思い出して連絡をとりたくなったり、月がきれいだと思ったり、木々の匂いに胸をつまらせたり、お店の店員がすごく感じがよかったり、悪かったり、眠れなかったり、夢でお母さんに会ったり、むかし飼っていた猫に会ったり、そうしたことが語るに値しないということはないはずだ。

⑥ ぼくも、友人たちも、ある時期、そうしたことばかりを小説に書いた。⑥ ぼくは大学生のころの彼らの顔や声よりも、彼らが書いた小説のシーンのほうをなぜか、よく覚えている。

(島田潤一郎『長い読書』による)

注 黒井千次……一九三二年生まれの日本の小説家。

ミラン・クンデラ……一九二九年チェコスロバキア(現チェコ)生まれのフランスの作家。二〇二三年没。

感熱紙……熱を感知することで色が変化する紙。インクを使用せず印刷する際に使われる。

問一 二重傍線部 a k e のカタカナを漢字で書け。

問二 傍線部①「そういうもの」とは小説に対するどのような考えか。説明せよ。

問三 傍線部②に「若い頃は、クンデラのその指摘に驚き、そして不思議なくらいに胸を打たれた」とある。若い頃は、クンデラの指摘のどのような点に驚き、胸を打たれたのか。説明せよ。

問四 傍線部③に「終わるはずの物語は終わらなくなる」とある。「終わらなくなる」のはなぜか。説明せよ。

問五 傍線部④に「ぼくはただ伝えただけではなかった」とある。「伝えたい」以外に何をしようとしていたのか。説明せよ。

問六 傍線部⑤「人は物語をとおして、さまざまなことを理解しようとする」とはどういうことか。説明せよ。

問七 傍線部⑥に「ぼくは大学生のころの彼らの顔や声よりも、彼らが書いた小説のシーンのほうをなぜか、よく覚えている」とある。筆者が「小説のシーン」のほうを「よく覚えている」理由は、筆者の考えをふまえるとどのように考えられるか。説明せよ。

問八 波線部「小説をとおして考えなさい」という言葉の「真意」を、筆者はどのように捉えることになったのか。本文中にある次の四語のすべてを使いながら百五十文字以内で説明せよ。

人生 言葉 理解 記憶

第二回 次の文章は、「貝合」の一節である。

ある夜、忍び歩きをしていた男君は、母を亡くした姫君が北の方腹の姫君と貝合することになったものの貝の入手に苦慮していることを知る。童に頼んで男君が垣間見をしていると、すでに多くの貝を手に入れた北の方腹の姫君が素知らぬ顔でやつて来て、母を亡くした姫君に話しかける。これを読んで、後の問いに答えよ。

「若君の持ておはしつらむは、など見えぬ。『かねて求めなどはすまじ』と、たゆめたまふに、すかされたてまつりて、よろづは、つゆこそ求めはべらずなりにけれど。いと悔しく。少しさりぬべからむものは、分け取らせたまへ」など言ふさま、いみじくしたり顔なるに、にくくなりて、「いかでこなたを勝たせてしがな」と、そぞろに思ひなりぬ。この君、「ここにも、ほかまでは求めはべらぬものを。若君は何をかは」といらへてゐたるさま、うつくし。うち見まはして渡りぬ。

このありつるやうなる童、三、四人ばかり連れて、「わが母の常に読みたまひし観音經、わが御前負けさせたてまつりたまふな」と、ただこのゐたる戸のもとにしも向きて念じあへる顔、をかしけれど、ありつる童や言ひ出でむと思ひゐたるに、立ち走りて、あなたに去ぬ。いと細き声にて、

A かひなしと何なげくらむ白波も君がかたには心寄せてむ

と言ひたるを、さすがに耳とく聞きつけて、「今、方人に。聞きたまひつや」「これは、誰が言ふべきぞ」「観音の出でたまひたるなり」「嬉しのわざや。姫君の御前に聞こえむ」と言ひて、さ言ひがてら、恐ろしくやありけむ、連れて走り入りぬ。

「ようなきことは言ひて、このわたりをや見あらはさむ」と胸つぶれて、さすがに思ひゐたれど、ただいとあわたたしく、「かうかう、念じつれば、あのたまひつる」と語れば、「いと嬉し」と思ひたる声にて、「まことかはとよ。恐ろしきまでこそおぼゆれ」とて、頬杖つきやみて、うち赤みたるまみ、いみじくうつくしげなり。「いかにぞ、この組入の上よりふと物の落ちたらば」「まことの仏の御徳とこそは思はめ」など言ひあへるは、をかし。

「とく歸りて、いかでこれを勝たせばや」と思へど、昼は出づべきかたもなければ、すすろによく見暮らして、夕霧に立ち隠れて、まぎれ出でてぞ、えならぬ州浜の三尺ばかりなるを、うつほに作りて、いみじき小箱を据ゑて、いろいろの貝をいみじく多

く入れて、上には白銀黄金しろかねこがねの蛤はまぐり、うつせ貝などを、ひまなく蒔まかせて、手はいと小さくて、

白波に心を寄せて立ち寄らばかひなきならぬ心寄せなむ②

とて、引き結びつけて、例の隨身に持たせて、まだ暁に、門のわたりをたたずめば、昨日の子しも走る。

嬉しくて、「かうぞ、はかり聞こえぬよ」とて、懷よりをかしき小箱を取らせて、「誰がともなくて、さし置かせて来たまへよ。さて、今日のありさまの見せたまへよ。さらばまたまたも」と言へば、いみじく喜びて、ただ、「ありし戸口、そこはまして今日は人もやあらじ」とて入りぬ。

州浜、南の高欄かうらんに置かせて、這はひ入りぬ。やをら見通したまへば、ただ同じほどなる若き人ども二十人ばかり、さうぞきて、格子かうし上げそそくめり④。この州浜を見つけて、「あやしく」誰がしたるぞ⑤と言へば、「さるべき人こそなけれ。思ひ得つ。この昨日の仏のしたまへるなめり」「あはれにおはしけるかな」と喜び騒ぐさまの、いとものぐるほしければ、いとをかしくて見るたまへりとや。

注 若君……この部屋に住む姫君の弟君。

すかされ……だまされ。

観音經……『妙法蓮華經みょうほうれんげきょう（法華經）』第八卷第二十五品、『観世音菩薩普門品かんぜおんぼさつふもんぼん』の別称。観音の功德を説く。

かた……「方」と「潟」を掛ける。

方人……味方。

組入……組入天井。木を格子形に組み、板を張った天井。

州浜……州が出入りしている海岸の形状にならった作りもの。州浜台。台上に山水や草花などの景物をあしらった。

問一 二重傍線部①～⑤について、それぞれ文法的に説明せよ。

例 受身の助動詞「らる」の未然形の一部

問二 傍線部ア「かねて求めなどはすまじ」、イ「さりぬべからむもの」、ウ「いかでこなたを勝たせてしがな」、エ「負けさせたまつりたまふな」、オ「えならぬ」を現代語訳せよ。

問三 和歌A「かひなしと何なげくらむ白波も君がかたには心寄せてむ」について、以下の問いに答えよ。

1 この歌を詠んだのは誰か。次のa～fの中から一つ選び、記号で答えよ。

a 男君 b 母を亡くした姫君 c 北の方腹の姫君 d 童 e 若君 f 母

2 「君」は誰を指すか。1の選択肢a～fの中から一つ選び、記号で答えよ。

3 この歌を現代語訳せよ。

問四 波線部aに「観音の出でたまひたるなり」とある。童たちはなぜこのように判断したのか。説明せよ。

問五 波線部bに「連れて走り入りぬ」とある。童たちはなぜ連れ立って走り入ったのか。説明せよ。

問六 あには、文章中の一語が入る。最も適切な語を、これより後の文章から選んで答えよ。

問七 波線部cで「いとをかしく」と評しているのはなぜか。五十字以内で説明せよ(句読点を含む)。

問八 右の文章「貝合」は、平安時代後期ごろに成立したと考えられている短編物語集に収められたものである。この短編物語集の名称を次のa～eの中から一つ選び、記号で答えよ。

a 『平家物語』

b 『雨月物語』

c 『大和物語』

d 『堤中納言物語』

e 『大鏡』

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ(設問の都合で返り点、送り仮名を省いたところがある)。

齊、桓公出獵、逐鹿而走、入山谷之中。見一老公而問之曰、「是為何谷。」対曰、「為愚公之谷。」桓公曰、「何故。」対曰、「以臣名之。」

① 桓公曰、「今視公之儀狀、非愚人。何為以公名之。」対曰、「臣

請陳之。臣故畜牝牛、生子而大、売之而買駒。少年曰、『牛不能

② 生馬。』遂持駒去。傍隣聞之、以臣為愚。故名此谷為愚公之谷。」

桓公曰、「公誠愚矣。夫何為而与之。」

③ 桓公遂歸、明日朝、以告管仲。管仲正衿再拜曰、「此夷吾之過

也。使堯在上、咎繇為理、安有取二人之駒者乎。若有見、暴如

④ 是、叟者又必不与也。公知獄訟之不正、故与之耳。請退而修

政。」

孔子曰、「弟子記之。桓公覇君也、管仲賢佐也、猶有^d以^ル智^テ為^ヲ愚^ス者^ト也。況^e不^レ及^バ桓公管仲^ニ者也。」
(『説苑』による)

注 齊桓公……春秋時代、齊の国の君主。

儀状……容貌や立ち居振る舞い。

牝牛……めす牛。

駒……子馬。

少年……若者。

傍隣……近隣の人。

管仲……春秋時代、齊の大臣。名は夷吾。

正衿……居ずまいを改める。

堯……古の聖君。

咎繇……古の賢臣。

理……裁判官。

叟……老人を呼ぶ尊称。

獄訟……訴訟。

記……覚える。

問一 二重傍線部 a「夫」・ b「若」・ c「耳」・ d「猶」・ e「況」は、それぞれ文中でどのように読むか。その読み方を送り仮名も含

めてすべて平仮名で記せ(現代仮名づかいでもよい)。

問二 傍線部①「今視公之儀状、非愚人也。何為以公名之」を現代日本語訳せよ。

問三 傍線部②に「傍隣聞之、以臣為愚」とある。「傍隣」はなぜ「臣」を「愚」としたのか。最も適当なものを次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

ア 子馬を子牛だと言う若者の言葉を信じて、牛のつもりで育てた馬を人に与えてしまったから。
イ 牛が生んだ珍しい馬だと若者に勧められ、子牛を売ったお金を与えて子馬を買ってきたから。
ウ 子牛を高値で売って子馬を買おうとしたが、うそを若者に見破られ追放されてしまったから。
エ 子どもに子馬を買い与えようと貴重な牛を売ったが、そのお金を若者にだまし取られたから。
オ 筋の通らない若者の言い分に抵抗もせず、子牛を売って買った子馬を奪われてしまったから。

問四 傍線部③に「此夷吾之過也」とある。管仲はなぜ「此」は自分の「過」だと言うのか。「此」の内容を明らかにし、管仲が自分の「過」と言う理由を説明せよ。

問五 傍線部④「安有取人之駒者乎」を書き下し文に改めよ（現代仮名づかいでもよい）。

問六 傍線部⑤に「又必不与也」とある。誰が、誰に、何を与えないのか。それぞれに該当する語を文中から抜き出して記せ。

問七 傍線部⑥「有以智為愚者」とはどういうことか。最も適当なものを、次のア～オのうちから選び、記号で答えよ。

- ア 賢い者が愚かな者のように振る舞わなければならないことがある。
- イ 賢い者が愚かな者をだましてまで利益を得ようとすることがある。
- ウ 賢い者が愚かな者に同情して政治を刷新しようとすることがある。
- エ 賢い者が愚かな者と協力して世の中を良くするようなことがある。
- オ 賢い者が愚かな者より世間の出来事を知らないということがある。

問八 孔子は「愚公之谷」の話からどのようなことを覚えておくべきだと弟子たちに言っているのか。説明せよ。